



死体を探して

——雨の影が躍る梅雨の自室で、カッターを持った私は、どくどくと流れ出る黒いそれを眺めていた。

\*       \*

「行方不明の女子高校生、遺体で発見」

七月二十一日、秋田県能城市風見の郊外で女性の遺体が発見された。遺体はA・Kさん（16）。近くの高校に通う二年生で、十七日夕方から行方不明となり、翌十八日に両親から捜索願が警察へ出されていた。発見された場所が普段人が近づかない場所であることや、遺体に抵抗した形跡が無いことから、警察では自殺もしくは親しい者の犯行と見て調査を続けている。

\*       \*

## 本編（前）

---

死体を眺めるのが好きだ。いや、正確には「死」を考えることが好きだ。生きている者の忙しい姿を嘲笑うかのように、ただそこに在るとするのが良い。それにゆっくりと腐り、自然に還っていくのもまた良い。今流行りのエコってやつかもしれない。

もっとも、私は殺人者でもなければ、毎週のように事件に遭遇する名探偵でもないから、そういうモノを見るのは、もっぱらウェブサイトだ。フィルタリングに引っ掛かるようなブックマークを巡回し、死体の画像を集める。それが私——コウノ　アリサの日課だった。

出来る事なら生の死体を見てみたい、できれば還っていく様子も見てみたいなとか思う。でも流石に興味のために殺人者になるのはリスクが高すぎるよなあ。そう考えながらカッターナイフを弄ぶ。カチカチと刃を出してみると錆とも違う黒いものがこびり付いていた。

そんな事を考えるような私は、

「はあ？　今なんて言ったの？」

ある夏の宵、私は電話越しにはしゃいでいる親友のナツメ　シオりに聞き返していた。

『だからあ、夏じゃん？』

「うん」

いや、分かってるけど。

『夏と言ったら怪談じゃん？』

「うん」

だから？

『だから、死体探しに行こう！』

親友のダイヤモンド5カラット分くらい明るい声を聞いて、頭が少し痛くなった。

「あのね、シオリ。そんな簡単に見つかるわけないでしょ」

もし見つけれられると言うなら、私に教えてもらいたいところだ。パソコン越しに見るのとは訳が違う。正真正銘、生の死体を見られるなんて考えるとわくわくする。

シオリが続ける。

『いや、面白い情報が入ったんだって！』

「……何よ？」

『井戸の底の自殺者』

「……切るね」

『ああっ！　待ってアリサ！』

本気で切ろうとしていたのだが止められた。話を聞いた事を少し後悔する。だって馬鹿らし過ぎる。なんだ井戸の底って。時代遅れも甚だしい。もうビデオテープ全盛期は過ぎただろうに。

『本当だって！　結構信憑性高いからっ！』

「疑わしい限りね」

『うー一、……ああもうっ！』

明らかに温度差のある私の声に、シオリが唸る。

『とにかくっ』

ひとしきり唸って満足した後、彼女は声を張り上げた。

『明日の放課後一緒に探そ！　じゃあね！』

「ちょっ、シオリ！」

……切れた。

はぁ、と軽く溜息を吐く。でも内心は明日への期待でいっぱいだった。もしかしたら素敵な死体に出会えるかも知れないのだ。

「——んでね、彼がさぁ」

うんうん、と私は笑顔で応じる。表面上では仲の良い友達通しの会話に見えるだろうけど、実は私はその子の話をあまり聞いてない。

相槌を打ちながら、昼休みの教室を見渡す。クラスのほとんどは思い思いのグループに分かれて話をしていて。話題は昨日のドラマやら好きなタレント、この前のテストの成績、恋愛——よく話せるもんだと、他人事のように眺める。

意識を目の前の子に戻す。彼女はさっきから自分の彼氏の話をしているようだった。

「——なんだって！　良くない？」

「うん、いいと思うよ」どうだって。

人の幸せを損ねる気は無いから、耳障りの良い言葉を返す。それに相手が喜ぶ。誰かと分かり合った気になる。

なんて表面的なんだろう。

そんな風に思っているけど、表に出すことは無い。長い学校生活の中で、一人になるということが、どれほど痛々しいことか分かっているから。特に女子は。いつだか誰かが「女子の最小単位は『一人』じゃなくて『一組』だよ」と言っていたのを思い出す。的を射ているなど感じた。

生き延びていくためだ。内面を守るため、表面に笑顔のコーティングをして過ごす。あああ。私に群れからはぐれる強さがあつたなら。笑顔にも関係にも、もう疲れた。

早く放課後にならないかなあ……。

「……ここ？」

「そのはずだけど……」

放課後、私はシオリと街外れの林の中にいた。夏の午後六時なんてまだ明るいはずなのに、頭上に茂った葉のせいで薄暗い。遊歩道なんかがある場所ではないので、足場は土と葉。色々な植物が足をくすぐる。制服で来たことを後悔。こういう時スカートって不便だ。

私の少し前をシオリが進んでいた。美少女の部類に入るだろう親友が茂みを掻き分けるのは、なかなか絵になっている。だからどうしたと言うわけではないけど。

「ねえ、まだ？」

疲れてきたのと草が不快なのとで、私は帰りたくなってきた。基本的に肉体派じゃないのだ。文化部所属だし。

シオリはまだ進んでいく。彼女は自分の興味が絡むとどこまでもいってしまうタイプなのだ。特にこういうオカルトな話題には目が無い。私も一体何度連れ出されただろう。

「ねえ、シオリ……」

もう帰ろう、と言いかけた時だった。

「あった！」

数歩前でシオリが大声を出した。それに驚いたのか、頭上でくつろいでいたカラスが一斉に飛び立つ。カァカァと喚く声を聞きながら、私はシオリの隣に並ぶ。

「……あった」

「……井戸がね」

私たちの目の前には古びた井戸があった。もちろん使われていないと思う。草に侵食されて、人の手が加わったような形跡は無さそうだった。

二人で近づいて行って底を覗いた。一番下まで光が届いていない。ずいぶん深い井戸のようだ。シオリが持ってきた懐中電灯をつけて下を覗き込もうとする。落ちたら絶対に上ってこれないであろうその縦穴を、光がしだいと露にしてい

そこには――

「……って何も無いじゃないっ！」

身を乗り出していた私は、思わず叫んでしまった。本当に何も無い。水は枯れてるし、そこにはいくらか落ち葉が積もっているだけで、目的の死体なんてどこにも無かった。

「……あれー……？」

どうして？ という目でシオリが私を見る……っておかしいでしょ。私が聞きたいくらいだよ。それに期待が外れてがっかりしてるのは私もだからね？

私は脱力したまま、シオリはおかしそうに首を傾けたまま、二人でとぼとぼと来た道に戻る。来た時に不快に思っていた草が、今度は手のひらを返して「まあ、世の中そんなもんさ」と慰めているようだった。

――いつの間にか林の外に出ていた。目の前に今はもう使われていない工場跡が現れる。そのまま帰るのも癢な気がして、二人で中に足を踏み入れた。

錆付いた重機の上によじ登って寝転がる。凄く疲れていて、このまま暗くなるまで眠りそうだった。

少しの空白。

どのくらい経ったか、シオリが口を開いた。

「……無かった」

「そうだね」

「……放課後、棒に振っちゃった」

「……うん」

「アリサ……」

親友の方を向く。彼女は天井を眺めながらたった一言、

「……ごめん」

といった。

私は答える代わりに、この自分勝手な親友の頭を撫でてやる。さらりとした髪感触。

「ちょっ、アリサやめてよーっ」

二人でじゃれあっているうちに、段々元気が沸いてきた。とりあえず家まで持つくらいのパワーは充電されたのではないだろうか。

ふう、と一息ついて起き上がる。

「ほら、シオリ。帰ろう？」

「……うん」

先に立ち上がって手を伸ばす。シオリの華奢な手が触れた。

「——あれっ？」

「？ どうしたの？」

起き上がろうとしたシオリが何かを見つけた。

「あれ、一体なんだろ……？」

彼女の指差す先を探す。

重機と壁の隙間に、何かが挟まっていた。

「ただいま……」

誰もいないだろうな、と半ば確信しながら玄関を開ける。手を伸ばして電気を点けると、白を基調にした内装が現れた。靴を脱ぎ散らかして家にあがる。リビングには行かない。誰もいないだろうし、行きたくない。リビングへと通じる扉を無視して階段を上った。

上ってすぐのところにある自分の部屋に入る。薄暗い。夕方だし当たり前か、と軽く自分にツッコミを入れながらブラインドを開ける。西日が入って、部屋の中が黄金色を帯びた。

重たいカバンを降ろす。そしてベッドに身を投げた。

「……」

しばらく、夕闇に焼ける部屋の色を眺めていた。こうしていると心が落ち着く。

一人っ子で、おまけに両親の帰りが遅い私はこんな風に一人でいることが多かった。とりたてて寂しいとは思っていない……はずだ。いや、もう慣れてしまったというべきかも知れない。きっと、慣れなければいけなかったのだろう——。

身を起こし、ベッドから机めがけて一步踏み出す。足はフローリングを捕らえ、重力に逆らい始める。立ち上がった瞬間、一瞬明滅する視界。軽く伸びをして二歩目を繰り出す。

机の上に散らばっていた錠剤の空などを片付けて、一冊のノートを広げる。

ノートと言っても勉強するためのものではない。A・K（私のイニシャルだ）という文字が裏に小さく書いているだけで、タイトルも何も書かれていないそれは、言わば私の避難所のようなものだった。辛いこと、やるせないこと、どうにもならない想いを散々に書き散らしてある。そうでもしないとやっていけそうに無かったから。最近は書き込む回数がずいぶん多くなってしまっている気がする。

私は、まだ何も書かれていないページを開いた。そうしてまた今日も、真っ白なノートの世界を暗い色の想いで塗りつぶし始める。

翌日、移動教室から自分のクラスまで戻ってくるとシオリが待ち構えていた。

「あっ、アリサ！」

私を見つけるやいなや、明るい声を、大きく手を振るモーションつきで送ってきた。正直あれに対応したくない気もするが、無視して拗ねられるのも億劫だった。

「一体何してるの、シオリ……」

「アリサの席でお弁当を食べておりますっ」

「どけ」

教科書で軽くシオリの頭を叩く。どうしてわざわざ隣のクラスの席で弁当を広げているんだお前は。おまけに弁当はおいしそうだし。私に対するあてつけか何かか。色々言いたいことはあったが、敢えて何も言わない。さりげなく嫌そうな表情は作って見せたけど。

一緒に食べようとシオリが口から泡を（いや、正確にはご飯粒を）飛ばしながら言うので、私もそこで弁当を広げることにした。誰かと食べるのは久しぶりだな、と思い出したかのように考える。私は基本的にクラスメートとは話をしないのだ。

蓋についてご飯粒を丁寧に箸で除去しながらシオリが切り出した。

「ねえ、アリサ」

「うん？」

「昨日、見つかなかったじゃん？ 死体」

「それ食事中に言うか……」

「いいじゃん」

「少なくとも人がミートボール食べてる時に言うな」

「ん……まあ、ともかく」

お茶を一飲みしてシオリは続ける。

「昨日さ、アレ見つけたじゃん？」

「……ああ、アレね」

「もう読んだ？」

「まだ、全部は」

「え？ まだなの？」

「だって昨日は疲れてたし」

事実、昨日部屋に帰ってからの数時間は部屋のベッドに沈んでいたようで、記憶が全く残っていなかった。やっぱり慣れないことはするもんじゃない。今度から死体探しはもっと近場で開催するよう提案しようかと思った。

「そっかあ……」

まあ仕方ないよね、と言ってシオリがまた一口お茶を飲む。彼女は、読み終わったら貸して、と付け加え、後は私の食事を眺めてニコニコと笑っていた。

自転車が軽く鳴き声をあげて止まる。まるでまだ走っていたかったとでも言うように。ちょっと

申し訳なく思いながら、私はいつもの柵近くに自転車を置いた。

工場の敷地に足を踏み入れる。もちろん、私は工場関係者ではない。けれど、それを咎めるような人は、廃墟と化したこの建造物にはもういない。ただ名前も分からないような雑草たちが傾きかけた日差しの中に立っているだけだ。

あたりの錆付いた壁を眺めながら、建物のうちの一つに入る。そうして、壁際に忘れ去られたように停まっている重機によじ登る。ここがこの廃墟における私の定位置だった。

少しの間、裏の林に凄む蝉たちの合唱を聴く。まだ八月に入っていないとはいえ、長くなった陽や高い温度は最早真夏のそれだった。

私はいつも通り、ノートに書き込もうと思った。最近放課後になるとここへ来て、その日一日の毒を吐き出すのが日課となっている。自分が抜けられない負の連鎖の中にいるような気がして少し恐ろしい。それでも書くことをやめた時、自分がどうなるかを想像すると、まだ今の状況がましに思えた。

カバンを膝に乗せ、ノートを探す。ノートはいつもの場所にちゃんと――

「あれ……？」

無かった。

いや、もしかしたら別のところに入れたのかも知れない。そう思ってカバンを漁った。しかし、結局出てこない。

つまり、

「忘れてきた……？」

今日の朝、学校でカバンを開けたときにはまだ入っていた。それなら、きっと置いてきた場所は自分の机の中か、ロッカーの中だろう。

はぁ、と溜息を一つつく。このまま家に帰る気にもなれない。それになにより、あのノートは自分の近くに置いておきたかった。

私は学校へ向かうため、荷物をまとめ始めた。

『大スクープだよっ、アリサ！』

電話に出た瞬間、聞きなれたシオリの声が耳元で爆発した。思わずケータイを耳から遠ざける

。現在の時刻は午後十一時を回ったところ。疲れてるし、今日はそろそろ寝ようかと思っていたらシオリからの電話に妨害された。

わざと不機嫌な声を出しながら尋ねる。

「一体何、シオリ……」

『だからっ、見つけたんだって！』

「何を？」

興奮のあまり目的語やら補語やらが抜けまくっている親友に聞き返す。この述部だけで全てを理解するほどの読解力は持ち合わせていない。

『ほら、死体のことだよ！』

「夜中にそんな言葉叫ぶなよ……」



ご近所さんからあらぬ誤解を受けるぞ。

そんな私の心配を知らずにシオリが続ける。

『あれからもう一回調べなおしてみたんだけどさ』

「シオリ、暇なの？」

『やっぱり本当にあったんだよ！』

ピタッ、と。

一瞬思考が停止した。

「どういうこと？」

『あのね、ネットで色々検索してたら古い新聞のデータベースにある記事がヒットしたの...  
...ねえ、アリサ。あの拾ったノート、読んだ？』

「ごめん、まだ.....」

いいながら机の上に置いたノートに手を伸ばす。手が引っ掛かりカッターが落ちた。

『聞いた後でいいから目を通してほしいんだけど.....記事の内容話すね？』

いくらか落ち着きを取り戻した親友の声だけが私の部屋に朗々と響く。

『七月二十一日、秋田県能城市風見の郊外で女性の遺体が発見された。遺体はA・Kさん（  
16）。近くの高校に通う二年生で、十七日夕方から行方不明となり、翌十八日に両親から捜索  
願が警察へ出されていた。発見された場所が普段人が近づかない場所であることや、遺体に抵抗  
した形跡が無いことから、警察では自殺もしくは親しい者の犯行と見て調査を続けている——』

「.....『A・K』？」

それは最近、どこかで見た覚えがあった。

話を聞いたまま、ノートの裏表紙を見る。そこで私は固まった。

『アリサ.....ちょっと確認して欲しいんだけど』

「.....うん」

『ノートの裏にさ.....』

「.....うん」

A・K。

そこには自分と全く同じ、そのイニシャルが刻んであった。

校門前に自転車を置く。そのまま昇降口に入った。靴棚から中靴を出して足に引っ掛ける。パ  
タパタと音を鳴らしながら教室に向かった。

教室には誰もいなかった。どこかの運動部が着替えにでも使っているのか、いくつかエナメルバ  
ッグが置いてある。

まず自分の机の中を調べる。無い。じゃあロッカーかと思ってそっちも探す。無い。

「あれ.....？」

どうしてだろう。絶対にあるとしたらここのはずなのだけど——

そう思っていたら不意に、

『カトウ アキ』

それが、このノートの持ち主の名前だとシオリは言った。どんな手を使って調べだしたかなんて分からないが、とにかく今重要なのは、その名前が確かにA・Kであることだった。そして、これは確かにノートに書かれたものと一致していた。

『アリサ……夜に悪いけど、ちょっと今からノート読んでみてくれない？』

「……了解」

もしかしたら私は今、とんでもないものを手にしているのではないか。そんな風に思いながらシオリの電話を切る。電話を置いた自分の手首の傷がやけに目に付いた。

少しの覚悟の末、私はノートを開く――。

「探してるのってコレ？」

呼びかけに振り向くと、そこに六、七人くらいの女子が立っていた。手にしているものを見る。――私のノートだ。

「……そうだけど」

何か不穏な空気を肌で感じながら、私は答える。ノートを持った一人が近づいてきた。

「そう……なら返すわ」

捨てるように手渡される。

「あ、ありがとう……」

私はそう言って立ち去ろうとした。

その時だった。

「カトウさんってそんなこと考えてたんだあ……」

女子のうちの一人が私に聞こえるように言った。背筋に冷たいものを当てられる感覚。急いで振り返る。

――全員が私を見ていた。

侮蔑の混じった、冷たい瞳で。

思わずその場に立ち尽くす。逃げなきゃいけないと思った。けれど足はセメントにでも詰められたように動かない。

別の一人が言った。

「いつも楽しそうに笑ってるけど、嘘なんだね」

他の人が答える。

「え？ いまさら気づいたの？」

「遅いって。皆もう知ってたのに」

「あ、そうなんだあ。もっと教えてくれても良かったのにい」

ケラケラと。

全員が私を見て笑い始めた。

――逃げなきゃ。

どうにか後ろを振り向いて足を出した。だけどその瞬間バランスを崩して倒れる。さらに気持ち

悪い笑い声が起こった。急いでノートを拾い起き上がりて走った。それでも、まだ笑い声がついてくる気がした。

——気がついたら、また廃墟に戻ってきていた。どうやって来たのか覚えていない。自転車で来たようにも思うし、恐怖のままに走ったようにも思う。辺りはすでに薄暗くなっていて、私はそんな中心で一人しゃがみこんでいるようだった。

どうして、と思った。どうして、人の表面しか見ていないような人間が、私のノートを、私の内側を汚すのか。私は、一体どうしたらよいのか。

もう、何も考えたくなかった。

このまま消えてしまいたかった。

小さく丸まって、自分の膝に顔を埋める。ノートが頬に当たった。顔を上げる。

しばらくノートを見た後、私はペンを取り出して、ノートを広げた。

書かなければ。

そう思った。

一つページをめくる度に頭がくらくらとした。こんなにも生きている人間の想いは強いのかと、滲んだインクに込められたものに圧倒されながら、それでも私は読むのは止めなかった。読まずにはいられなかった。

何とか最後のページにたどり着く。

一目見て、これは遺書なのだと分かった。そして、明らかに今までのものとは違う弱弱しい文字が、こびり付いた土が、彼女の精神を表しているかのようなようだった。

一言一句を逃さず読む。

——読み終わった。

時計を見る。午前二時を回った。でもそんなことは関係なかった。ただ、いてもたってもいられなかったのだ。部屋着の上にウィンドブレーカーを羽織る。勢いよくドアを開くと、涼しい風が流れ込んできた。

少し、夜の空気を吸い込む。

たいした確証なんて無い。

それでも彼女の元へ行かなければならないと思った。

もう疲れました。

表面を飾るだけの人たちと

表面を飾るだけの会話をして

表面を飾っただけの関係の中で

いつ嘘がばれるかびくびくしながら

笑っていくことに疲れたのです

一人になることもできず

誰かの内側に踏み込む勇気も

自らの内側をさらけ出す勇気も

何も持たないで

ただノートを埋める事しかできない

私に疲れたのです。

## 本編（後）

---

工場廃墟前で自転車を乗り捨てる。

道をそれて林の中に入った。そのまま草を掻き分けて進む。その度に夜露が弾けて私の服を濡らした。

「っ！」

葉が私の頬を切った。思わず顔をしかめる。

それでも進み続けた。

ただ、前へ。

やがて藪が途切れる。

——井戸が在った。

そして、その縁に立ち足元の闇を見つめる少女がいた。

「……っ待って！」

私の声に彼女が振り向く。

そうして哀しげに微笑んで——

彼女は消えた。

「……あ……はあ……」

体の力が抜けて、その場にへたり込む。肩で息をしながら、闇に目を凝らした。でも、今私が見たものが一体何だったのかなんて分かりそうも無かった。

頭上を見る。前ここに来た時は気がつかなかったけど、ちょうど井戸の上には木の葉が無く、そこだけ夜空が覗いていた。

「……そっか」

何となく。

何となく思ったのは。

「これが死ぬって事なんだ……」

遙か井戸の底の闇で死んだ彼女と、そんな彼女の上に広がる星空を見て、そう感じた。そして、それが生きることなのだと思った。

足に力を込めて立ち上がる。

帰ろう。

井戸に背を向けてそう考えてから、少し振り向く。

誰もいなかった。

——でも

「……ノート、後で返すね」

誰かいたのかもしれない。

「……じゃあね」

私は藪の道を進み始めた。

「結局、どうだったんだろうね」

ある日の放課後、私とシオリは二人並んで歩いていた。

「どうって？」

「だから、アキさん」

「……さあね」

シオリの漠然とした問いの答えを探そうと空を眺めてみる。シオリもつられて上を見上げた。雲の変化をぼんやり見ながら、ぶらぶらと歩く。

「結局さ」

シオリが口を開いた。

「死体、見つかなかったね」

「当たり前でしょ。記事にあるとおり、発見されて、引き上げられたんだから」

「だよねえ……」

蝉の声に耳を傾けながら進む。

「ねえ、アリサ」

「なに？」

「ちょっと面白い情報見つけたんだけど」

「……またオカルト？」

「うんっ！」

楽しそうにシオリは言う。

「第二回死体探し大会！」

「また死体探すのかよっ！」

「え？ だめ？」

シオリがキョトンとした表情でこっちを見る。私はシオリに言う。

「飽きた」

「へ？」

「私はもう死体探し飽きちゃったから、行くんならそれ以外ね」

しばらく、シオリは私の顔をまじまじと見つめていたが、やがて何でも見通したかのように微笑んで一言「りょーかいっ」と言った。

「あっ、そういえば」

「どうしたの、シオリ？」

「いや、ペンも置いてきたほうがよかったかなあ、なんて」

「うーん……流石にいいんじゃない？ そこは……」

置いてきたノートについて二人で言いながら、廃墟を振り返らずに歩く。

私たちの目の前には八月の空が広がっていた。